

追悼 隅谷三喜男会長

新 堀 邦 司

(常任理事・東京 YMCA)

1. 国際ボランティア学会設立に寄せて

国際ボランティア学会初代会長の隅谷三喜男先生が2003年2月22日、突然のように天に召されました。

隅谷先生は、国際ボランティア学会に特別なご関心と情熱をお寄せくださり、学会の創立の段階から今日まで5年間にわたって会長としての重責を担われました。本学会の発展のため、お忙しい中を熱心にご指導下さいましたことに心より感謝申し上げます。本学会に対する隅谷先生の期待の言葉は「21世紀の国際社会とボランティア」(「ボランティア学研究」創刊号)に掲載されています。これは本学会の設立記念講演として述べられたものですが、この度読み直してみても、先生の高いご見識には改めて多くのことを教えられ、励まされる思いがいたします。家庭崩壊や地域共同体崩壊の著しい昨今の現実を前にして、先生はこの国の将来に非常な危機感を持っておられました。しかし、阪神淡路大震災を機に沸くように起こった力強いボランティア活動に心を動かされ、この国の将来に少なからず希望を見出していたようです。記念講演の中で次のように語っておられます。

「そのような意味で隣人の発見ということが非常に重要ですが、そうした意味で私はこの数年、日本の社会にまた新しい可能性が出てきたのではないかと思うことは、ボランティアがあります。この学会も、この大阪の地で開催されました。大阪というか、関西の人が圧倒的に多数です。なぜ関西にそのようなボランティアの組織というものが出てきたかという、一つはやはり大震災だと思うのです。そこで非常に悲惨な人々の姿というものを見た時に、私たちの人間の存在としての根底にある、人としてのあり方、私とあなた、という関係をそこでもう一度見させられた。といいますか、見るに見かねる、というところにやはり我々人間存在としての根底的な意味があると思うのです。それでその人達を見た時に、『ああ、これはなんとかしてあげなければならない』ということで、ボランティア運動というものが、関西を中心として非常に発展しました。これは、日本の社会の大きな変化です。」

次に本学会への期待として次のように述べておられます。

「ボランティアの組織が欠落している、あるいは欠落していた、ということ

新堀 邦司

が、日本の社会にいえます。日本社会全体がそうですが、ボランティア組織というものが非常に弱体です。ですから、このような学会を持つことによって、お互いにいろいろな情報を交換して、そうしたいろいろな問題、それは外国人ばかりではなく、国内でもいろいろな問題を持った人々に対するボランティアの組織を作っていくことが可能になると思います。」

2. 生い立ち、信仰、学問

隅谷三喜男先生のご生涯を知る手がかりは、自伝「激動の時代を生きて」(2000年岩波書店)と蛭名賢造が著した伝記「隅谷三喜男」(1998年西田書店)があります。ここでは、自伝を参考に、先生のご生涯の概略を紹介させていただきます。

隅谷先生は1916年(大正5年)8月に、キリスト者のご両親の間に生まれ、幼い時から信仰的な薫陶を受けています。一家は東京麻布にあったスラム街に住んでいました。というのは父親がスラム街の子供のために夜学校を開いていたからです。(もっとも先生が生まれた当時は、夜学校は廃校して勤め人だったとのこと)隅谷先生のヒューマニストとしての素地は父親譲りだったといえます。その後一家は、千葉県の南房総に移り住みましたが、ここで1923年(大正13年)の関東大震災に遭遇し、再び東京のスラム街に戻ります。

「私が人生の大激動を体験したのは、小学校1年のときの〈関東大震災〉であった。天地をひっくり返す大地震でわが家は倒壊し、焼失してしまった。それは自然現象とそれに付随した出来事であったが、私の生活も一変した。」(「激動の時代を生きて」)

一家は再び東京に戻り、スラム街で生活するようになりました。多感な少年は、スラム街という底辺で生きる貧しい人々と身近かに接しながら、人権、社会正義という問題意識に目覚めていったのです。スラムでの経験にキリスト教の学びが重なり、これが先生の思想と信仰の骨格を形作っていきました。「私は小学校のときからかなり忠実に教会の日曜学校に通った。中学に入ってから熱心な教師に出会ったこと、さらには同志社大学の神学校を出立ての若い情熱をもった伝道師に可愛がられたことなどもあって、よく教会に出入りし、中学4年(今日の高校1年)のクリスマスに洗礼を受けてキリスト教徒となった。」(前掲書)

ある雑誌にこのときの心境を次のように書き綴っています。

「彼(筆者注・キリスト)が示したように、どんなことがあろうと、十字架から顔をそむけることのない勇気を、私に与えてください!そして、愛する

祖国の危機に際しては重い十字架を背負うことのできる者にして下さい。」
(前掲書)

先生は初志を貫徹し、この決意そのものの生涯を送られたのではないでしょう。即ち、キリストに教えられた「隣人愛」の信仰を堅持し、「社会正義」に裏打ちされた「共生」の実現に向けて生涯を歩まれたのです。

思うに「社会正義」というテーマを学問的に構き上げていったのが、その後の旧制一高、東大における学びでした。

旧制一高時代、先生は基督教青年会 (YMCA) に入会し、さらにキリスト教信仰を深めました。当時、日本のキリスト教界に影響を与えていた弁証法神学の雄カール・バルトやエミール・ブルンナーの神学書に親しみました。先生のキリスト教信仰は正統主義 (オーソドックス) ですが、これはカール・バルトの影響によるものだと言われています。カール・バルトはナチズムに激しく抵抗した実践的な神学者でしたので、隅谷先生は政治、社会問題への取り組みについても少なからず影響を受けているものと思われます。

また、旧制一高時代、三谷隆正教授から大きな薫陶を受けています。特に、「自分の頭で思考する訓練」「他人を押し退けて就職するな」ということを教えられたということです。

大学で経済学を学びたいと決意した理由についてはこのように書いておられます。

「私は時代の大きな流れの中で、歴史を動かしているのは何かを知りたいと思っていた。ヨーロッパ中世の歴史を見れば、それを動かしていたのはキリスト教ではないかと考えたが、近世以降は経済が最大の影響力をもっているように思われた。」(前掲書)

先生は、経済学を学ぶ過程でマルクス経済学に出会い、資本主義の持つさまざまな問題点に目覚め、社会正義観をいっそう強固なものとししました。マルクス主義者となることはなかったが、卒業の前年、治安維持法により警察に逮捕され、80余日拘留されたのです。その結果、内地 (日本国内) で社会事業か労働関係の職業に携わりたいという望みが果たせなくなり止むなく満州 (中国東北地方) の鞍山にある日本資本の製鉄所に就職することになりました。この製鉄所には中国人従業員が4、5万人働いていました。こうして、先生は「社会の底辺に入るべきではないか」とのご自身の考えを実践に移し、中国人従業員のために一生懸命に尽くされました。当時、昭和製鉄所に働いていた日本人の一人に栗田茂がおりました。彼は五味川純平というペンネームで「人間の条件」というベストセラーを書き上げました。主人公のモデル

新堀 邦司

となったのが若き日の隅谷先生だった、といわれています。

しかし、中国人従業員のための働きにも大きな限界があったのです。

先生の教え子でもあり、国際ボランティア学会の会員でもある徳久俊彦氏は「経友」（東京大学経友会刊行156号）の中で「隅谷三喜男先生を偲ぶ—ゼミ生の一人として—」と題する追悼文の中で次のように述べています。

「そこで中国人労働者のために力を尽くされるが、結局は『日本帝国主義の枠の中』で働いたに過ぎないと考え、『これを社会科学的視点から考え直さねばならない、また信仰の面でも神学的に整理してみねばなるまい』と考えたと記しておられる。これがその後の先生の歩みの原点となった。」

3. 多面的なご活躍

戦後の隅谷先生のご活躍は大学内にとどまらず、社会、政治、国際及びキリスト教界とまことに広い分野に及びました。多領域に及ぶ先生の働きの全容を紹介することは私には到底無理です。幸い、徳久氏が上手に要約しておられますので、先の追悼文の一部を引用させていただきます。

「1946年9月帰国、東大経済学部へ復帰されてからの東大におけるご活躍、特に『社会政策』から『労働経済学』への展開、経済学部一致への努力、大学紛争でのご苦勞、そして定年退官後の信州大学、東京女子大、日本労働協会、国鉄監査委員、先生の代名詞ともなった『成田シンポジウム』、社会保障制度審議会を始めとする政府関係の委員、通商産業政策史編纂、キリスト教教育基金、恵泉女学園、ラスキン文庫等々におけるお働きについては、多くの方々のご存知のとおりである。」

また、キリスト教界における功績について同氏はこう記しています。

「さて先生は先に述べたような信仰と学問の問題を抱え、満州時代にも毎朝ドイツ語の勉強を兼ねてバルト等の神学を読んでおられたが、1949年、日本YMCAの指導者として登場される。その第一声と言うべき『日本におけるキリスト者とマルキシズム』が1949年9月号の日本YMCA同盟発行『開拓者』に掲載されている。そこでは『絶対的な福音』と相対的な『世界観』としてのマルキシズムとを、常に『相対化』に陥ろうとする現実の中で如何に統一的に捉えるかが語られ、さらには当時の東欧における『人間疎外』の問題が取り上げられている。(略) そのような中で49年秋から『七一雑報』などの資料を整理し、『50年2～3月に一気に書き上げ』11月『近代日本の形成とキリスト教』（新教出版社）を出される。この本は『確固たる信仰による統一を欠いて』おり『社会の激動に対処すべき方途を知らない』日本の教会のために過去の客観的分析をなし、社会的実践のための戦略図を描く準備作業とし

て、さらには信仰の歴史を科学的に探求することによって『信仰と学問』『信仰と理性』の問題に正面から取り組み、日本におけるキリスト教の歴史を『キリスト教会の歴史』として『社会思想史的に構成しようと試みた』ものであった。」

先生の国際的な働きについても触れないわけにはいきません。先生は1951年間末にバンドンで開催された世界キリスト教学生連盟(WSCF)に出席し、多くの優れたアジアの大学教師に出会うことによってアジアへの関心を深めました。これを機に新たな研究に取り組み、その成果は「韓国の経済」(岩波新書1979年)「台湾の経済」(共著、東大出版会1992年)としてまとめられました。この他、北京大学への経済学書1万冊の寄贈、中国留学生への援助、北朝鮮への援助にも奔走されました。アジア諸国への関心の高さに関わりについて徳久氏は「先生の問題意識の基定には、先に述べた『第2次大戦中の日本人としての責任』があることは言うまでもない」と書いています。

先生とアジア諸国の人々との交流の一端を示すものとして韓国人学者・池明観氏との友情が挙げられます。池明観氏は、かつて「世界」に「韓国からの通信」と題して韓国における民主化運動の様子を連載し、大きな話題を呼びました。当時は実名を伏せ、「T・K生」のペンネームで連載を続けていましたが、陰で多くの日本人が池明観先生を支援していました。隅谷先生も支援者の一人であったことが、このほど「世界」9月号で池明観氏によって明らかにされました。

先生を語るには「成田シンポジウム」「成田空港円卓会議」での名まとめ役(座長)としての働きを忘れるわけにはいきません。最も困難な空港問題の解決にあたり、運輸省と地元農民の双方から「この人ならば」と信頼を寄せられたのは、まさに、先生の高潔なお人柄と社会正義感、優れた学識経験があったことだったでしょう。空港問題の解決に向けて構築された「共生の考え方」は後々にまで高く評価されてよいはずで

先生は、少子・高齢化が急速に進んでいるわが国の社会保障制度にあり方についても関心をお持ちでした。1991年に「社会保障制度審議会」が設けられました。先生は、本審議会の委員長に就任され、1995年7月、時の内閣総理大臣・村山富市宛に「社会保障体制の再構築(勧告)」を提出しています。その勧告書のコピーを本学会常任理事の山口徹氏より送っていただきましたが、21世紀に向かって日本の社会保障はいかにあるべきかについて示唆に富んだ勧告書でした。勧告書は、21世紀に向けて「国民が立場の違いを超えて助け

新堀 邦 司

合うという社会連帯の精神」を強く訴え、かつ、「負担の増大に耐える合理的で効率的な制度」を設計することの必要性を説いていました。1995年1月に阪神淡路大震災が起こったのを機にボランティア活動や社会保障の機運が高まったことを考えると歴史的意味合いの色濃い優れた勧告であったといえます。

晩年の先生はイギリス経済思想史とキリシタン史の研究をまとめ上げようと考えておられました。1998年秋、大阪大学で国際ボランティア学会設立総会が開かれました。私は幸運にも東京～大阪間を新幹線で先生のお供をいたしました。行き帰りの車中で、先生の来し方や国際的なご活躍の様子などをたっぷりとお聴きする機会を与えられました。その折、先生はキリシタン史研究についての抱負を語ってくれました。研究の成功をまとめる時間がなく、天国へ旅立ってしまわれたことは、いまとなっては残念でなりません。

4. 国際ボランティア学会への思いと課題

1995年5月、戦後50年を記念して東京YMCAで開催された特別講演会において、隅谷先生は次のように語っておられます。

「社会的に見ると、戦後の一つの大きな思想の流れとして、個人化というものが進みました。(略)しかし、それならば一人ひとりが個性化して徹底して個人の権利だけを主張したならば、社会はどうなるでしょうか。それは社会の崩壊です。これはまさに終末の事態です。個人個人が勝手なことを言うのですから。社会的な連帯というものはなくなります。ですからそれに対し個の連帯、連携というものをどのようにつくるかということが、今日問われている非常に大きな問題です。

私たちはそのかすかな光を阪神大震災の中で見たと思うのです。それは今までどこにそういうエネルギーがあったかわからないほど、ボランティアたちが大勢阪神に集まったことです。」(「日本は何をしたか、しなかったか」日本基督教団出版局1996)

こうおっしゃって先生は阪神淡路大震災を契機として起こったボランティア活動に期待をいただいております。

「国際ボランティア学会」を設立するに際し、どなたに初代会長の重責を担っていただいたらよいのだろうか話題になった折、発起人たちが異口同音に挙げた候補者が隅谷三喜男先生でした。愛弟子の徳久俊彦氏を介してお願ひしたところ、ご快諾いただけたのは何よりの喜びでした。具体的な打ち合わせのために、JR有楽町駅前の「交通会館」の事務所をお尋ねした折、先生は私に新しく生まれる学会への期待と課題とについて率直にお話下さいま

した。本学会への期待を設立総会の折の記念講演で次のように語っておられます。少し古いこととなりますので、皆さんの記憶を呼び起こすために書き記してみましよう。

「二つの問題があるといった一つ、つまりボランティアの組織がなかった。受け止める組織が非常に弱体だということが問題だといいましたが、もう一つの問題は、それに対する理論というものが無いということです。『ボランティアに理論なんかいらんじゃないか』と考えられる方もおるかもしれませんが、けれども、やまりこのようなものを全国的な組織なりなんなりとし持って、それを推進していこうと思えば、その考え方を整理しなければならない。どのような問題に直面するか、そのようなことをやはりきちんと整理しながら、日本におけるボランティアの立つ基盤、その組織の形とか、活動のあり方を考える必要があります。」（「ボランティア学研究」創刊号）

先生はボランティア運動を進めていく組織作りとこれを推進、発展させていくための理論の構築の必要性に加え、学会が国際的な視野と問題意識とをしっかりと持つことを大きな課題として、私たちに提示しておられます。

先生は「人生の座標軸」ということを、常々、口にしておられました。人生には水平軸と垂直軸の二つがあります。二つのうち、先生は垂直軸の大切さを説いておられました。

「宗教的世界などでは、しばしば＜永遠＞ということが説かれる。永遠とは何か。時間をどれほど延長しても＜永遠＞ではない。永遠とは時間とは異質の世界である。私は単純化していえば、時間の世界を水平な軸、永遠にかかわる世界を垂直な軸と見、この二つの世界で＜生＞を考えるべきではないか、と考えるようになった。私はこれを座標軸と呼ぶ。」（「激動の時代を生きて」）

先生は水平軸と垂直軸を生きられた方でした。むしろ、しっかりした垂直軸を持っておられたが故に水平軸をも確かのものとして生きられたのではないのでしょうか。

東京女子大学で行われた隅谷三喜男先生のご葬儀には、私は「国際ボランティア学会」の関係者として参列いたしました。その折、神様から与えられた生命を他のため人のために捧げ尽くした先生のご生涯に、改めて深い感銘を覚えました。

隅谷先生、長い間、ご指導をありがとうございました。「国際ボランティア学会」に寄せられた先生のご期待に応えて、わたしたちは本学会の発展のために尽くします。

（常任理事）

新 堀 邦 司

(なお、隅谷先生の著作が2003年4月から「隅谷三喜男著作集」として岩波書店から刊行されています。)